「行動基準」アクションコード計画表

氏名（団体名） 八幡太郎

氏名・団体名を
記入下さい。

記入例

農作物名 カブ

栽培作物を
記入下さい。

コード	実施基準	基準内容
○ 必須項目		
1 安全安心への取組		
取組項目にチェック 下さい。 予定日を記入のこと		
1.1 化学合成農薬の取組		
1.1.1	必須 ☒	国内登録農薬の中で、滋賀県農作物病害虫雑草防除基準に基づく農薬を使用する。
	年 月	
1.1.2	必須 ☐	農薬の取扱い、ラベルの指示に従って行う。
	23年10月	取組予定時期を 記入ください
1.1.3	必須 ☐	農薬散布について、記録を行う。
	年 月	
1.1.4	必須 ☐	（農薬購入の場合）計画的な購入を行う。また、散布におけるやむを得ない残量は、散布むらの補正対応で処理する。
	年 月	
1.1.5	必須 ☐	（苗を育成する場合）育苗記録と使用農薬の記録を行う。
	年 月	
1.1.6	必須 ☐	点検・モニタリング・予察により適期に適正な防除に努め、最低必要量による農薬防除を行う。
	年 月	
1.2 肥料		
1.2.1	必須 ☐	購入した肥料はその化学成分表を確認し、窒素、リン酸、カリウムなどの含有量を把握する。
	年 月	
1.2.2	必須 ☐	過度の施肥による土壌、地下水、作物の汚染が起これないように、必要最低限の施肥量を適切な方法や技術で施肥栽培する。
	年 月	
1.2.3	必須 ☐	施肥について記録を行う。
	年 月	
1.3 農薬の飛散・残留への対応		
1.3.2	必須 ☐	周辺地への農薬のドリフト（飛散）がないように、散布方法や散布機具のノズル対応、風向きなどに気をつける。
	年 月	
1.3.4	必須 ☐	指定農作物について、出荷前の休薬期間「収穫前日数以上に加算日数」を設ける。附表の休薬日数指定作物表に基づき実施する。
	年 月	
1.4 堆肥の適正利用		
1.4.1	必須 ☐	堆肥などの使用はリスクを判断し、完熟堆肥を利用するなどリスクを回避するよう工夫する。（附表の堆肥その他の有機質資材の適正施用量を参照）
	年 月	

1.5 土づくり			
1.5.1	必須	☐	土づくりに向けた前作の稲わら、籾殻、麦わら等のすき込みを行う。
	年	月	
1.6 安全管理			
1.6.1	必須	☐	肥料が農産物、種苗、梱包材、農薬などと接触しないよう保管する。
	年	月	
1.6.2	必須	☐	防護服・防除器具等は、防除作業後に清掃・洗浄する。
	年	月	
1.6.3	必須	☐	栽培する品種を選択する際、消費ニーズ、耐病性、耐虫性、農薬や肥料の使用量が少ないものなどから品種を選択する。ただし、地域の伝統野菜は、この限りでない。
	年	月	
1.6.4	必須	☐	農作物の輸送時の安全対策として輸送用のトラック、コンテナ等を異物混入などがいないか確認するとともに清掃を行う。
	年	月	
1.6.5	必須	☐	農産物の取扱いについて、安全対策を行う。体調の悪い人やケガのある人の作業を中止する。手洗い、つめの長さ、喫煙・休憩・食事の場所など安全対策に工夫する。
	年	月	
1.6.6	必須	☐	農地や農業施設から出るゴミを減らすと共に分別処理し、野菜くずなど作物残渣は農地に還元したり、家畜飼料に利用する。
	年	月	
1.6.7	必須	☐	農薬の空き容器の処理は、適正処理として公的な機関などの廃プラスチック回収を利用する。
	年	月	
1.6.8	必須	☐	作業者は農薬のラベルに従って、ゴム靴、防水服、ゴーグル、ゴム手袋、マスクなどの防護服を着用する。
	年	月	

2 景観形成

2.1 圃場管理			
2.1.1	必須	☐	麦、稲などのわらや籾殻などは農地に還元する。圃場全体での焼却はしないが、やむを得ない一部での焼却は火の管理に努める。
	年	月	
2.1.2	必須	☐	圃場の適正管理に努めるとともに、特に収穫後の農作物残渣を放置せず、早期すき込みをする。
	年	月	
2.1.3	必須	☐	圃場の使用していない間（未使用期間）は、適正に雑草管理をする。
	年	月	
2.2 耕種的雑草対策			
2.2.2	必須	☐	風景を損なうような除草剤の使用を避け、景観に配慮して耕種的防除を行うなど、除草剤の使用について工夫する。
	年	月	

3 水質管理と水利用

3.1 水環境対策			
3.1.1	必須	☐	魚介類に強い影響を与える恐れのある化学合成農薬魚毒性区分C類の使用を避けるよう努め、やむ得ず使用する場合は、水域に流出しないよう工夫する。
	年	月	
3.1.2	必須	☐	除草剤をはじめ農薬や肥料を必要以上に使用しないよう気をつけるなど、使用した農薬や肥料が水域を汚染しないよう各種代替技術を活用する工夫する。
	年	月	
3.1.3	必須	☐	化学肥料の保管場所には、梱包の破損や雨の影響や水域を汚染しないよう気をつける。
	年	月	
3.2 水利用対策			
3.2.1	必須	☐	未処理の下水は灌漑に使わず、下水が圃場に入っていないようにする。
	年	月	
3.2.2	必須	☐	農産物を最後に洗う水や農産物と触れる水は飲んでも害のない、地域の飲用水の基準に適合しているものを使用する。
	年	月	
3.2.3	必須	☐	農産物を洗う水が、下流水路などの水域を汚さないよう工夫をする。
	年	月	
3.3 生態環境			
3.3.3	必須	☐	自分の農業活動によって起こる環境破壊を最小限にとどめるために努力をする。
	年	月	
3.4 研修			
3.4.1	必須	☐	行政等が開催する研修会に進んで参加する。
	年	月	

4 審査その他事項

4.1 審査			
4.1.1	必須	☐	自己審査を年1回以上行ったことが、チェックリストの記録でわかるようする。
	年	月	
4.1.2	必須	☐	自己審査の結果、不適合であった項目を改善し、記録として残す。
	年	月	
4.1.3	必須	☐	審査の受入時には、関係記録を準備し、対応が出来るようにする。
	年	月	
4.3 エネルギー			
4.3.1	必須	☐	ハウスの加温、穀類の乾燥など機械等の使用で不必要・非効率的なエネルギー消費がないよう努める。例えば、不必要な照明の消灯や木質ボイラーの利用等を行う。
	年	月	

○ 選択項目 (選択項目をチェックのうえ実施の予定日を記入のこと)

下記の1から4の中の選択項目については、中から3項目を選択して実施ください。

1.1 化学合成農薬の取扱い		
1.1.7	選 択 ☐	ミツバチなどの有用昆虫やナノテープ・粘着板等を利用して使用農薬を削減する。
	年 月	
1.3 水環境対策		
1.3.1	選 択 ☐	農作物について年1回以上残留農薬分析を行うよう努める。
	年 月	
1.3.3	選 択 ☐	農薬のドリフト対策として緩衝地帯や遮蔽物・バンカー作物などを設ける対策をする。
	年 月	
1.5 土づくり		
1.5.2	選 択 ☐	土づくりに向けた、土壌改善、土壌団粒化、土中の微生物量の増加などの努力する。
	年 月	
1.6 安全管理		
1.6.9	選 択 ☐	農薬に対する依存を軽減・残効肥料を有効利用することから、輪作に努める。
	年 月	
2.2 耕種的雑草対策		
2.2.1	選 択 ☐	畦畔を有する圃場の畦畔草刈により除草剤を控える耕種的対応や圃場周辺へ在来性植物によるカバープランツ、花などの景観作物を植栽する。
	年 月	
3.3 生態環境		
3.3.1	選 択 ☐	農地周辺に生息する動植物を把握しており、それらと自分の農業活動にどのような関係があるか認識する。
	年 月	
3.3.2	選 択 ☐	農業生産に支障の無い範囲で、自分の農地内または周辺地の動植物の多様性を助長するために努める。ただし、獣害や害虫対策としては助長しない適正管理を行うものとする。
	年 月	
3.3.4	選 択 ☐	地域固有の品種特性や栽培技術、作物の特徴を守り育む、地域野菜の栽培に努める。
	年 月	
4.4 周辺配慮		
4.2.1	選 択 ☐	住宅地等の近くでの作業は、早朝または夕方遅い作業での騒音・雑音は最小にするよう配慮する。
	年 月	

上記の1から4の中の選択項目については、中から3項目を選択して実施するものとする。